

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第45回 いのちの使い道

昨年のNHK大河ドラマ「直虎」を見終わった。きりだった。自分にもまだかにか何かを託すものはあるかな。自分を省みてみ、自分の想いを託してみた。

当事者の力 見せつきたい

〈2004年がんで2つの臓器を摘出〉
〈2005年全国初、がんサロンを開設。いまだ島根県下に26カ所にまで広がった〉
〈2006年全国初、がん対策推進条例を作り、現在35都道府県へと拡大していった〉
〈2011年〜16年まで7回がんサロン支援塾を開催し、全国にがんサロン開設、運営のノウハウをおすそ分けした〉
最近では高校の「いのちの授業」で学生と向き合った。さらに医師と同行して在宅医療も見学し、老人福祉施設も見て回った。今後、自分が必要にいけないのは何だろうと考えて見たとき、

「安心して住める街づくり」ではなかるうかと思った。
病院から送りだされた患者は安心して何処で過ごせばいいのだろう。年金だけで入れる施設などほとんどないのが現状だ。だから自宅が終の棲家とならざるをえない。「地域包括ケア」という素敵な言葉はあるが、私の住む地域ではまだまだ生かされてはいない。全国を見ても安心して住める街は限られた地域のみかもしれない。
医療、介護が連携して研究会などを開き、ネットワークをはかっているが、纏まりに欠け、まだその成果は出ていない。患者として、市民として、どのようにこれに絡んでいくか。そのためにこれまでの経験値を生かし、当事者の力を見せつけるしかない。
自分たちの住む街は自分たちで作るべき。訪問看護を充実させ、介護力をどう発掘していくか。行政にばかり依存することなく、各自が出来ることを各自が行い、これをいかに纏めるかだろう。私のいのちの捨てどころはこんなところにあるのだろうか。せつかく生きていくのだから、せめてその礎なりとも築けたらいいかな。そして去りたい。みなさんも一度「いのちの使い道」を考えて見られませんか。